

## 佐倉って何？

### ゼミグループメンバー

佐治洋之助 齋藤 章子 関とも子 滝田 良三 堤 源太郎

戸村 國夫

# 佐倉って何？

ゼミグループメンバー

佐治洋之助 齊藤章子 関とも子 滝田良三 堤源太郎 戸村國夫

## 目次

はじめに

1. 大友城、大椎城時代の千葉氏
2. 猪鼻城時代の千葉氏
3. 千葉城(猪鼻城)から本佐倉城(将門山城)へ
4. 本佐倉城から佐倉城(鹿島山城)へ

おわりに

## はじめに

佐治洋之助

文化庁は今年の4月25日に、地域の有形、無形の文化財で構成した「ストーリー」を認定する日本遺産に、新たに19件を認めたと発表した。その中に「江戸を感じる北総の街並み」と題し、佐倉、成田、佐原、銚子の四市「空港に一番近い江戸」が認定された。

考えてみると、千葉県である、安房(ある学説によれば安房という国は無かった?)・上総・下総、とりわけ我々が住んでいる下総国佐倉について何も解っていない、いや、知っているつもりだった。一昨年、旧佐倉町について表面をなぞってみたが、今回はもう少し深堀をしたく思う。

本佐倉城は千葉氏の城であったことは、皆さんが承知している。千葉氏とは、平常長が上総の権として上総国山辺郡大椎に館を置き本拠地とした。その子常兼の代になって下総への進出を一族と始めた。常兼は上総もしくは下総権介、あるいは両方の大椎権介と呼ばれ、その後千葉太夫と呼ばれた。その子常重は長男ではあるが惣領ではなく、房総平氏は千葉氏と上総氏の二流となった。

常重は大椎から下総千葉郡の千葉荘に移り、猪鼻の舌状台地に館を置き、下総の権介となり千葉介を名乗り、以降千葉氏の惣領は千葉介を名乗るようになった。

このあと、酒々井の本佐倉に城を築き、この城を守るかのように、そして誇るように岩富城、臼井城等約五十の城・砦・館が置かれた。その後は皆さんもご存じの通り、千葉氏により鐮木郷の鹿島山に築城工事に着手するも中断し、徳川の世となり佐倉城が築かれ城下町が形成された。

この城下町は見方を変えれば、地形の関係上他の城下町にない城砦都市、城郭都市とみてもよい構造になったのではないかと考察する。

平成28年度のゼミ研究として

本佐倉に築城し、酒々井を城下町として形成した時代考証・背景(流通・戦闘方法の変化)

本佐倉周辺の諸城の地理的要件と役目等

佐倉に築城し、猫の額のような狭い尾根に城下町を築いた地理的要件と役目

以上のごとく多々資料を漁り、解説し、現地を観察し、当時を想像し、一つのストーリー「佐倉って何？」を作りたいと思う。

## 1. 大友城・大椎城時代の千葉氏

佐治洋之助・戸村國夫

(1) 佐倉といえば、土井利勝や、堀田正睦、それと前回テーマに取り上げた津田梅子が有名だが、今回違う観点から佐倉を取り上げることにした。

(2) 佐倉は「佐倉」ではなかった。

徳川氏の所領になるまで、ここは鐮木郡の「鹿島台」と言われていた。それでは、本当の「佐倉」はどこなのか。

それは酒々井町にあった。即ち、千葉氏の居城のあった一帯が当時、「佐倉」であった。何時からか、「本当の佐倉は此处だよ」という意味で、そこが「本佐倉」と言われるようになった所以かもしれない。今回、この千葉氏を水先案内人に、佐倉に関係の深い出来事など足跡を探っていくこととした。

### (3) 千葉氏のルーツ

桓武天皇が延暦 13(794)年に平安京に遷都してから約 100 年後の寛平元(889)年、同天皇の曾孫・高望王は、平の姓を与えられ平高望となるとともに、上総介に任じられ、子の国香、良兼、良将、良正、良文を伴い関東に下向した。高望は 4 年の任期が過ぎても帰京せず、子の国香に常陸の国司(朝廷派遣の国役人)源護の娘を、良将には下総国相馬郡(千葉県柏、我孫子、茨城県北相馬郡)の有力者犬養春枝の娘を娶らせるなど、在地有力者との関係を深め、その勢力を拡大していった。さらに、常陸、下総、上総の国々の未墾地を開発して荘園(租税免除、役人立入り不可の私有地)とし、その権利を守るため武士団を形成した。

高望の子らはその所領を継承するとともに、関東各地に手を広げ勢力を拡大していった。高望の子孫の中から千葉氏が誕生するので、千葉氏のルーツはこの高望にあると言える。

### (4) 千葉氏の始祖

高望の末子良文は当初、相模国(神奈川県)の藤沢を拠点とするが、承平 4(935)年から天慶 3(940)年の 6 年間にわたる将門の乱を契機に下総国の相馬郡を獲得する。良文は以後、この地を中心に活動し、千葉氏の始祖となる。ちなみに、将門は良文の甥にあたるが、千葉氏とは直接関係がないので、彼についての説明は割愛する。以下、千葉氏の始祖良文に連なる特筆すべき子孫たちの活動について述べることにする。

### (5) 忠常の乱(大友城時代の千葉氏)

良文の孫忠常(良文系 3 代目)は、下総国香取郡の大友(東庄町)に城を構え拠点とし、房総全域に勢力を振るっていた。大友は当時、北に香取の海の湊、南に椿海の湊があり、また近くには岡飯田という宿があって、陸奥国へ通じる交通・流通の要衝を占めており、蝦夷攻略の最前線でもあった。

ところで忠常は、朝廷に逆らうつもりはなかったようだが、房総の国司の悪行に反感を抱いたのか、4年にわたり大規模な反乱を起こし、歴史に名を残している。

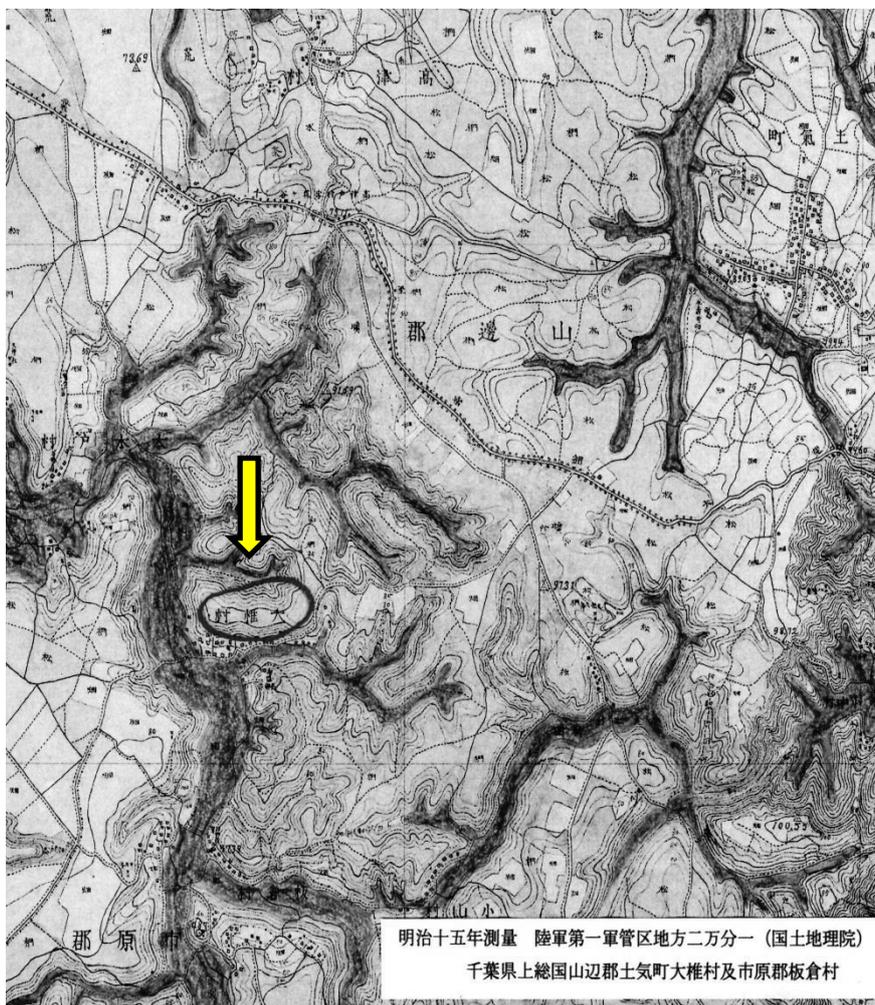
長元元(1028)年に安房守を殺害。朝廷は追討使を派遣したが乱を抑えきれず、忠常はさらに上総の国衙(国司の役所)を占領したのみならず、周辺の有力者を味方につけ、後任の安房守を追放するなど、反乱は長期化した。朝廷は後任の追討使として甲斐守源頼信を遣わしたところ、忠常は頼信と縁があったらしく、長元4(1031)年、頼信の陣に子らを連れて出頭し降伏、都に送られる途中で病死し、反乱は平定された。同行した子らは、朝廷における公卿による合議の末、処罰を免れている。処罰を免れた、忠常の子の常将(良文系 4 代目)や孫の常長(5 代目)は、長い戦いで荒廃した房総の再開発に着手し、その勢力を拡大させた。



### (6) 大椎城時代の千葉氏

忠常の曾孫で、常長の子・常兼(良文系 6 代目)は、大友を離れ、上総国大椎(千葉市緑区大椎町)に城を構え、大椎権介と称し勢力を誇示していた。

大椎は、下総国との国境の村田川上流部の山間部にあり、村田川水系と鹿島川水系の分水界ともなっている。したがって大椎は、水路として鹿島川を利用すれば、印旛の浦を経て下総の国府(市川市国府台)に、印旛の浦と香取の海を経て常陸の国府(茨城県石岡市)に、また村田川を利用すれば上総の国府(市原市国分寺台)に至ることができる。なお、国府とは国衙の所在地をいう。大椎はまた、陸路を東にとれば太平洋に面した匝瑳郡を経て先述の大友のある香取郡に、西に陸路をとれば内海(東京湾)に面した千葉郡に至り、さらに内海に沿って武蔵、相模、そして伊豆の国に至る交通の要であった。



## (7) 古代の房総あれこれ

### 房総武士の誕生

9世紀ごろから房総など関東では、都へ輸送中の税が群盗により強奪される事件が頻発していた。朝廷は、これの鎮圧のため軍事を得意とする貴族を国司として派遣するとともに、従前の軍団制(徴兵制)による兵士に代えて、郡司(郡の地元役人)や有力豪族などの子弟から選ばれた質の高い兵士をこの事件に対応させたいえ、国衙などの警護に当たさせた。この時期の有力豪族たちが武士の原型となった。千葉氏ら有力豪族たちは荘園の経営者として、また他の豪族間あるいは豪族と受領(現地赴任の筆頭国司)間の確執の調停者として勢力を拡大・拡充していった。

### 古代の房総風景

奈良時代のころの房総は、谷津田(低地にある湿田)の近くに集落が点在する以外、見渡す限り荒野が広がっていたと思われるが、朝廷は蝦夷攻略のための前線基地として位置づけ重要視していた。狙いは、租税徴収先の範囲拡大のほか、馬の獲得にあったと言われている。朝廷としては、地方との連絡手段として、また反乱への備えとして十分な馬の確保が必要であったと思われる。確保した馬は朝廷の経営する牧で育てられた。佐倉地域にも既にこの頃から牧があったかもしれない。

また、大化の改新では土地と人民の私有を許さなかったが、奈良時代の半ばから新たに開墾した土地は私有が認められるようになったため、貴族や寺社、地方有力豪族が土地の大規模開墾を進め、房総をはじめ全国に荘園と呼ばれる大規模な私有地が広がっていった。

### 古代の税制

主な税の種類には、租・庸・調が定められていた。

[ 租 ]は田に課せられるもので稲で納められた。稲は各地の郡衙に納められたのち、国衙の正倉(稲を収納

するための倉庫)に蓄えられ地方財源に充てられた。

[ 庸 ]は男子を対象に都での労役が課せられたが、主に布で代替するようになった。

[ 調 ]は男子が負担する税で、絹や麻などの織物か郷土の産物を納めた。絹は当時、天皇や貴族など高貴な身分の人々に用いられた。ちなみに房総では、奈良時代より上等な麻を産出していた。

庸と調は中央財源に充てられていたため、その貢ぎ物は運脚と呼ばれた農民や漁民自身が食料自弁で、徒歩で都に運搬する決まりであった。都との往復の途中、野盗に襲われ荷物を奪われたり、殺されたりすることもあったので、命懸けの任務であった。

## 2. 猪鼻城時代の千葉氏

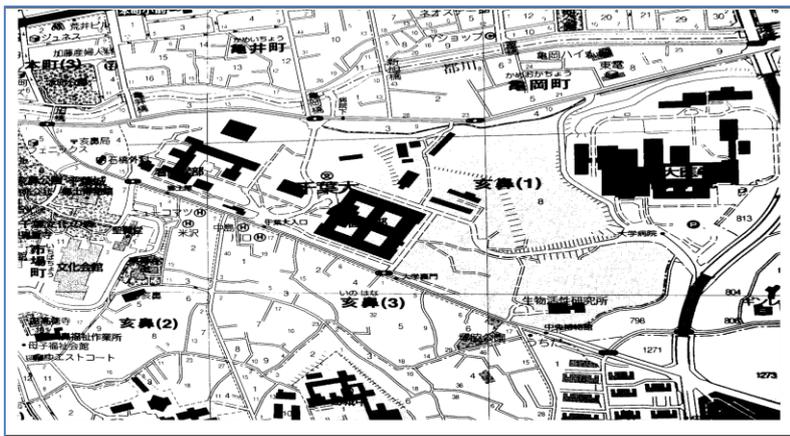
滝田良三・斉藤章子

### (1) 猪鼻城とは

平忠常が築城した大椎城は曾孫の常兼の時代に修復・拡張され千葉氏の本拠地となった。(この時代はまだ平姓を名乗っていた。)その子常重の時代になって(大治元(1126)年)大椎から下総国千葉郡猪鼻の台地に城を築いてその拠点を移し、以後本佐倉城に移るまでの330年間にわたって千葉宗家の居城として栄えた。猪鼻城は北は都川、西は断崖となった天然の要害ではあるが、石垣や天守閣を備えた近世城郭ではなく、住居や櫓の建つ館で、いわゆる中世城郭である。

城郭は現在の猪鼻公園から千葉大学医学部附属病院に至る広大な領域にまたがっていたとされるが、千葉大学にかかる外郭の部分は既に取り壊されて跡形もなく、主郭があったと言われている猪鼻公園部分についても、1980～90年代にかけて行われた発掘調査の結果、公園を取り囲む土塁が僅かに確できるだけであって、城跡であると明確に確認できる遺構は残念ながらほとんど残っていない。

現在見られる閣は、昭和42年に郷土博物館として小田原城の天守閣をモデルに建てられたもので、猪鼻城とは全く関係ない。



### (2) なぜ大椎から猪鼻に移ったのか

ところで、常重はなぜ大椎を捨てて猪鼻に移ったか。常重は長男であったが惣領ではなかったため、次男の常家に上総権之介を継がせて上総の守護とし、自身は海や街道に近く交通の便がよい猪鼻の地を選んだものと思われる。

千葉庄は下総における最大の荘園ではあったが、千葉の周辺は寒村で決して大きな町並みを形成していたわけではなかった。しかし、山間部であった大椎や土気に比べて海に面し土気・大椎からの道にも通じ、千葉氏の有力な領地である北総の相馬庄にも通じる街道に面した千葉は、下総に勢力を伸ばし支配を確立するのに好適な拠点であった。

常重が大椎から千葉に移った時点で平良文の流れをくむ房総平氏は千葉氏と上総氏の二つに分かれた。これ以降千葉氏と上総氏との間では所領を巡る争いが続き、常重の子常胤は下総権之介を与えられながらも、下総国を支配することに窮々としていた。

### (3) 千葉常胤と源頼朝

このような時にあって、治承5(1180)年に源頼朝が平氏に対して挙兵し、石橋山の戦いに敗れて伊豆から対岸の安房国(現在の鋸南町安房勝山の辺り)へ船で逃れてきたときに、常胤はいち早く頼朝に加勢し、その後の平氏や奥州藤原氏との戦いに活躍、頼朝の厚い信頼を得ることになる。

一方千葉氏以上に強大な軍勢2万騎を率いて、しかし常胤に遅れること2日後に頼朝勢に加わった上総広常は、頼朝に遅参を咎められ、かつ、その立ち居振る舞いを頼朝に嫌われ、謀反のかどで謀殺されると、その所領は常胤に下賜され、常胤の勢力は上総国まで及び、名実とともに上総・下総、両総の支配者となった。

以後千葉一族は名前に「胤」の字を付けるようになり、常胤の子、胤正(千葉介)、師常(相馬氏)、胤盛(武石氏)、胤信(大須賀氏)、胤通(国分氏)、胤頼(東氏)の六人は千葉六党と呼ばれ強い結束を保ち、その後全国各地に領地を持つ豪族となってゆく。



#### (4) 千葉宗家の盛衰

このように千葉氏は常胤の時代に上総・下総を中心に各地に領地を得て、鎌倉幕府の有力な御家人に成長した。その領地の大部分は常胤の子胤正に継承され、更に孫の成胤が継いだ。上総広常の遺領であった上総は成胤の弟の常秀に分配された。

ここに下総千葉氏と上総千葉氏が分かれた。特に上総千葉氏の常秀の子秀胤は鎌倉幕府の有力御家人である三浦氏と縁戚関係をもつことにより、鎌倉幕府の最高機関である評定衆に任命され(後にも先にも千葉氏で幕府評定衆に任ぜられたのは秀胤ただ一人)大きな勢力を振るった。しかし宝治元(1247)年に起きた宝治合戦で三浦氏が北条氏に滅ぼされ、その煽りを受けて秀胤も追討を受けると戦うことなく館に火を放ち自害、上総千葉氏は滅んだ。

一方宗家を継いだ下総千葉氏の成胤はその曾孫の頼胤の時代に蒙古来襲があり九州に出陣、頼胤は戦死、代わって嫡男の宗胤が九州に出向くと、下総の留守を預かった弟の胤宗が宗家の後を継いでしまったので、宗胤は帰ることをえないまま九州で没した。

このあと宗胤の子胤貞は南北朝の戦いで北朝方に味方して東上し、南朝側に付いた胤宗の子貞胤の千葉を収めたが、貞胤が北朝方に寝返って室町幕府より下総守護の地位を追認されると、以後その子孫が千葉宗家を引き継いでいった。このため宗家の地位を失った胤貞は九州に後退し九州千葉氏となってゆく。

#### (5) 室町幕府と千葉氏

北条氏を破り京都に室町幕府を開いた足利尊氏(暦応元(1338)年)は、東国統治のために鎌倉府を設置し、その長官(鎌倉公方)に弟の基氏を任命派遣し、補佐役(目付け役)として上杉家に関東管領を命じた。鎌倉公方は基氏の後、代を重ねるにつれて中央の室町幕府および関東管領とも対立するようになり、遂に享徳3(1454)年、鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を暗殺して享徳の乱が起きた。

将軍足利義政は成氏討伐のため駿河の今川氏を主体とした幕府軍を鎌倉に侵攻させたため成氏は下総国古河に逃れた。(古河公方の始まり)このあと関東の豪族達は古河公方側と関東管領上杉側とに分かれて戦うようになり、千葉一族もその中に巻き込まれてゆく。

#### (6) 馬加系千葉氏

康正元(1455)年千葉氏内部で反乱がおき、上杉方についていた千葉介胤直に対して、古河公方方に味方していた胤直の叔父である馬加康胤と筆頭家老原胤房は、胤直に公方方に付くよう要請したが聞き入れられなかったため、胤直の居城である猪鼻城を急襲(夜襲)し、胤直・胤宣父子はそれぞれ志摩城、多胡城に逃げ延びたが、康胤と胤房に攻められて落城自刃。ここに千葉氏嫡流は事実上消滅する。

後を継いだ馬加康胤は千葉宗家を名乗ったが、僅か1年後の康正2(1456)年将軍足利義政の派遣した東常

縁(千葉六党の一人・六男胤頼(東氏)の孫胤行の時に承久の乱(承久3年、1221年)の勲功で美濃国郡上郡山田荘を賜り、以降その子孫は美濃を本拠としていた。)により、上総・下総境の村田川(千葉市緑区と市原市の境)に追い詰められて自刃してしまう。

追討軍の東常縁は下総の市川城に軍を敷き、馬加・原軍と戦いを継続したが、東征の留守中に京都で起きた応仁の乱(応仁元(1467)年)で美濃国の所領(山田荘)を美濃守護代齊藤妙椿によって奪われてしまったことなどのため国元に帰還せざるを得なくなり、馬加一族と、上総に逃れていた原氏が再び息を吹き返した。

その後、康胤の子輔胤(弟とも養子とも言われ出生は不明)は戦乱で荒廃した猪鼻城を離れ、印旛沼南岸の本佐倉の台地に居城を移し、康胤の後をついで馬加系千葉氏として下総を統治してゆく。千葉常胤が一貫して鎌倉幕府の頼朝を守護し戦いに臨み勢力を拡大し、その子孫が幕府内で有力な御家人となっていくが、源家に代わり北条氏が実権を握ると、次第に幕府内の中枢から遠ざけられるようになった。常胤の時代後しばらくは上総・下総の一大勢力として主体性を保って活躍できたものの、鎌倉幕府崩壊後、室町幕府が成立し、南北朝の争い、鎌倉府と関東管領上杉氏との対立という中央の勢力争いの中に巻き込まれ、千葉一族は次第にその勢力を分散減衰させていく。

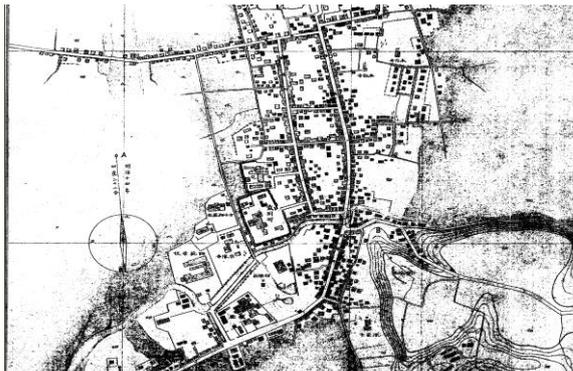
地方の豪族として主体性を保っていた時代は、まだそこで生き抜けていけたが、中央政府の争いに巻き込まれてゆくにつれて主体性を失い、遂には歴史の流れの中に千葉一族はその命運を共にしてしまう。

### (7) 千葉城＝猪鼻城・・・か？

ところで、千葉城とは猪鼻城であるというのがこれまでの通説であり、千葉宗家が馬加康胤によって滅ぼされ、猪鼻城は廃城となり、以降使用されることはなかったということになっていた。

しかし、近年になって、果たして千葉常重が大治元(1126)年に本拠地を上総国大椎から下総国千葉に移ってきたときに、最初から猪鼻の台地に城を構えたのか疑問視されるようになってきた。

一般に、鎌倉時代の城(館という方が正しい)は山の上ではなく低地にあるのが普通である。ところが、猪鼻城跡は千葉の町を見下ろす台地(猪鼻山)の上にある。



当時の千葉荘は下総国では最大の荘園であり、その中心に千葉氏は城(千葉館)を置いたと思われるが、13世紀までの資料では千葉城の記述はどこにも見当たらない。千葉城の名が初めて資料に出てくるのは14世紀になって、南北朝時代の建武2(1335)年、九州に留まった千葉宗家嫡男胤貞と、千葉に残って宗家を継いだ二男貞胤の戦いを記述した相馬文書に、「千葉城が胤貞によって攻撃された。」と記載されている。猪鼻城はこの戦いの後に築かれたとも言われて

いるが、猪鼻の名が資料(千学集抜粹)に出てくるのはさらに後の永正10(1513)年以降であり、胤貞と貞胤による千葉城の戦いから180年も後のことである。この頃は既に、千葉宗家は馬加康胤、原胤房によって猪鼻城が攻め落とされ絶えた後(康正元(1455)年)であるので、康胤、胤房に急襲され炎上したとされている。猪鼻城は、平地にあった千葉館であった可能性が高い。

従って、現在でいうところの猪鼻城は、その後16世紀になって千葉宗家に代わって下総国に勢力を拡大した原氏によって猪鼻の台地に築城されたものかもしれないということになり、千葉城(千葉館)と猪鼻城とは全く別の物ということになる。

通説では猪鼻城が馬加康胤によって滅ぼされ炎上し、以後廃城となって使われなくなるとされているが、猪鼻公園から千葉大学医学部付属病院までに至ると考えられている広大な城域は、その規模から中世の城郭ではなく、明らかに室町以降の戦国時代のそれである。その点からも猪鼻城は原氏が築いたものではないかと思われる。

現在ある猪鼻公園周辺の主郭部はともかくとして、その東に延びる千葉大を中心とした広大な外郭部は完全に破壊されてしまっていて、城域全体を一望することはできない。

ただ、規模の割にはその遺構からはそれを想像させるものは何も出ていないので、果たして考えられているような一大城郭であったのか、それとも原氏がその主力を臼井城に移した後の、千葉の町を守るための出城の役目だったのか、はっきりとしたことは何もわかっていない。

しかし一方では、中世の山城は山の上に防御のための簡素な建物や櫓を立てて、麓には日常生活と政務のための居館を築いたとも言われているので、千葉氏も平時は低地の千葉館を本拠とし、しかし平地では外敵からの防御に弱く攻められやすいので、有事の際に備えて詰めの城として使用するための小規模な城郭は備えていたかもしれない。ただ遺構からはそれに関するものは出ていないようである。

猪鼻城が千葉氏のものではなかったとなると、いつのころから千葉城＝猪鼻城ということになったのか。

元禄 2(1689)年の涌谷伊達文書に最初にその記述が見られ、それ以降の史書や地誌類にはいずれも猪鼻城跡を千葉城としている。近世になって、千葉氏の事績を讃え、その痕跡を猪鼻城に求めることにより、その見方が定着されてきたものと思われる。

### (8) 千葉氏嫡流の千葉城はどこにあったのか？

では、千葉氏の居住した千葉館はどこにあったのだろうか。千葉の郷土史家の間では、現在の千葉地方裁判所のある辺りは「御殿跡」と呼ばれており、これが千葉氏の館ではなかったかとされている。

ここを明治15年の陸地測量部の2万5千分の1の地形図で見ると、周囲を明確に堀と土塁で囲まれた一辺100メートルくらいの跡地が確認できる。これが中世の千葉館であるという証拠はないが、言い伝えられてきた地名と土地の形状から判断すると中世の城館跡に類似しているとも思われる。

いずれにしても、猪鼻城はその広大な城域の割には遺構がほとんど残ってなく、千葉館に至っては発掘調査さえできていない状況である。従って、これからの調査に期待し、待つしかないのが実情である。

## 3. 千葉城(猪鼻城)から本佐倉城(将門山城)へ

関 とも子

### (1) 馬加千葉氏と東常縁

千葉宗家を滅亡させ、千葉家を継いだ馬加康胤であったが、将軍足利義政が派遣した美濃国に所領を持つ千葉一族の東常縁により康正2(1456)年11月討ち死にとなる。その後、康胤の子胤持が早世したため、千葉氏胤の流れをもち下総国印旛郡印東荘上岩橋(現・酒々井町)を本拠にしていた岩橋輔胤が康胤の庶子となり、千葉輔胤として下総千葉氏の家督を継ぐことになる。

また、東常縁が下総国で戦っている間、美濃国守護代斎藤妙椿が常縁の所領を押領してしまい、これを聞いた常縁は、心のうちを和歌にした。常縁の和歌の評判を聞いた妙椿は、常縁に和歌を詠み送ってくれば所領を返却してもよいと伝え、この和歌が縁で常縁は美濃国の所領を取り戻すことが出来、美濃国に戻ってしまう。東常縁が去った後、馬加系の千葉氏の勢力が強くなり、千葉輔胤の子、孝胤が家督を継承するとほぼ下総全体を制圧した。

一方、古河公方と対立していた扇谷上杉氏の家宰、太田道灌は千葉宗家の遺児千葉実胤に千葉宗家を継がせるよう計るが、原胤房はじめ家臣団は足利成氏方の支援で反撃し、市川城が落ち実胤・自胤は武蔵国へ落ち延び武蔵千葉氏となるが、後に実胤は出家し美濃国に移り弟の自胤が武蔵千葉氏を継承した。

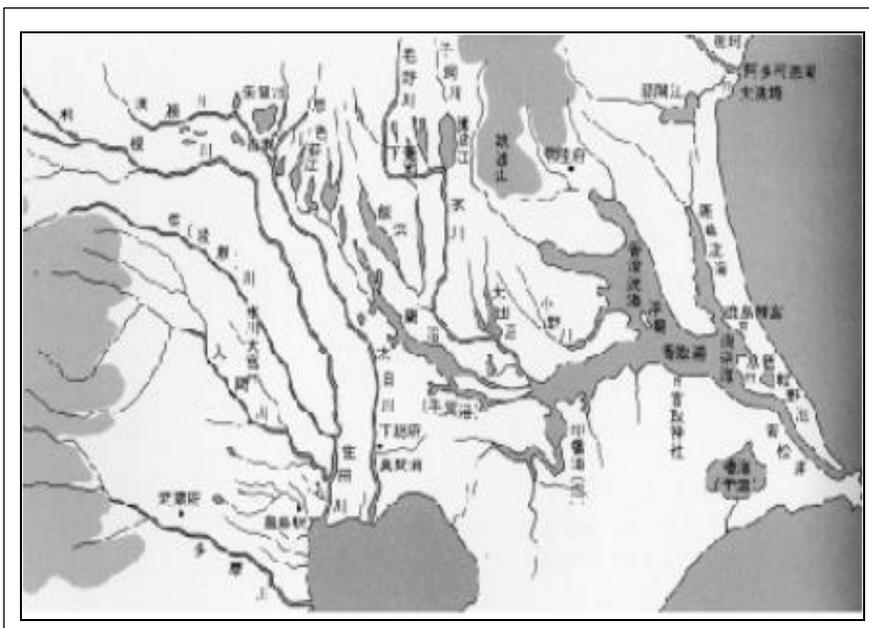
### (2) 千葉輔胤の本佐倉城への移転

千葉輔胤は嫡子孝胤の時代に岩橋郷の近くにある将門山(印旛郡印東荘佐倉)に築城しこれを本拠とした。千葉宗家時代の千葉城は落城後焼失しており、城の立地条件として旧来の騎射戦においては一定の防御力はあるが、平地に鼻のように突きだした台地にあり総合的に防衛機能が低く、防御は困難であった。更に上総・安房方面から武蔵方面に至る東京湾沿いにあり軍勢の移動が容易で、防御網を突破すれば簡単に侵入されることになる。

一方本佐倉城の立地に関しては、千葉輔胤自身が近くの岩橋郷を拠点とする岩橋殿であったためこの付近の地形を知り尽くしていた。つまり、①将門山の北側は印旛沼沿いの低湿地で沼の延長となっており、印旛沼が利根川・常陸川水脈と繋がることにより、古河公方・北関東の豪族と兵の移動や物資の輸送が極めて容易であった。②古河への水上交通の便と利根川・常陸川水脈を支配下に押さえることで、出撃・防御及び経済基盤などを満たしている。また③周辺には臼井城をはじめ、千葉氏一族の城塞が点在しており、城の総合

的防衛機能が高く、武蔵千葉氏・上杉方の侵入も受けにくい場所であった。更に④安房の里見氏や上総の武田氏ら、房総方面の振興豪族の勢力増大に伴う脅威を受けにくい場所であった。

現に文明 10(1478)年千葉孝胤は足利成氏と両上杉(山内上杉・扇谷上杉)との和睦に反対し、上杉方の太田道灌との境根原合戦で敗れ臼井城に籠城している。また翌年道灌は弟の資忠(図書)と武蔵千葉氏自胤に臼井城を攻めさせ、臼井城を落として千葉孝胤を放逐したものの、資忠は戦死し太田軍が撤退するとすぐに孝胤が巻き返し千葉自胤側勢力を下総から一掃したため、千葉自胤の下総復帰は達成できなかった。



千葉輔胤・孝胤時代に築城された本佐倉城は内郭部分の「城山」「奥の山」「倉跡」でその後「セッティ」更に外郭部分の「荒上」「向根古谷」が戦国期に築城されたものとされ、城下には「市」と「まち」が構成される。城周辺には東に「酒々井宿」南に「本佐倉宿」西に「鹿島宿」そして北側に「浜宿湊」という広大な城下町を形成していた。

### (3) 千葉勝胤の時代

孝胤の後家督を継いだ勝胤の時代は、両上杉の和解が成立し、関東に平穏をもたらしたが、古河公方足利政氏が、両上杉と連合し北条早雲と対抗したため、政氏の子、高基との父子の争いとなり、勝胤は高基を支持。またこの頃、原胤房の子、下総國小弓城主原胤隆と上総国真里谷城主武田信保との間で争いが起こり、原氏は勝胤の支援を得たが、武田信保は古河公方足利高基の弟、義明を招き入れ、小弓城(現・千葉市南生実町)を攻撃した。永正 14 年(1517)落城した小弓城に義明は入城する。小弓公方となった義明に対し、勝胤は古河公方足利高基や北条早雲との結びつきを強くした。



勝胤は晩年には曹洞宗・勝胤寺、時宗・海隣寺、法華宗・妙胤寺を建立するとともに家臣らと連歌会を催すなど文化的にも発展を遂げた。

### (4) 千葉氏と北条氏

勝胤の後の昌胤の時代、足利高基は嫡子晴氏に北条氏綱の娘を迎え、北条と同盟し小弓公方に対抗する。それが北条氏綱と小弓公方との直接対決となり第一次国府台合戦に発展し、北条方の勝利となった。義明方の多くが戦死し、原氏は小弓城に戻った。北条氏方となった原胤清は千葉氏一族の有力豪族臼井久胤が没した後その居城であった臼井城に嫡子胤貞を派遣し城主とした。

昌胤の後の利胤が亡くなったとき弟の親胤は 7 歳で家督を継ぐことになり、親北条氏の立場にあった家臣、原胤清・胤貞父子に実権を掌握された。表向き親胤は、小田原北条氏康の娘を室に迎え原氏の拠点であった千葉妙見社で元服を行っているが、北条氏に不審を抱いていた親胤は同じ反北条氏の立場だった古河公方足利晴氏と手を組んだため、16 歳の時城内妙見宮で暗殺されてしまう。その後千葉六党の海上氏に養子に入っていた昌胤の三男胤富が家督を継いだ。元龜 4(1573)年本佐倉城は火災により炎上し、胤富は城普請を命じている。

そしてその子邦胤は北条氏政の娘を妻に迎え入れ、北条氏の勢力を背景に統制力強化を図ったが、結果的には北条氏に取り込まれる原因となった。邦胤は戦国末期に北条氏の指示により本佐倉城の支城として鹿島城築城を命じるが、完成を待たずに家臣の楯田万五郎に天正 13(1585)年 29 歳の時暗殺される。邦胤殺害には逸話があり、新年祝い事の席で楯田万五郎が配膳中 2 度放屁したことで邦胤が怒り罵倒。その後の成り行きに無念を抱いた万五郎は夜半に寝床に忍び入り殺傷という偶発的な死亡であった。その後北条氏は千葉氏を家臣化し、氏政の五男直重を邦胤の娘婿に送り込み千葉氏を支配下に置くようにした。

#### (5) 小田原の役と千葉氏の滅亡

天正 18(1590)年 7 月秀吉の小田原の役で千葉氏は北条に味方して小田原に出陣し活躍するが、北条氏の敗北で千葉重胤を最後に大名としての千葉氏は滅亡した。秀吉の軍勢は小田原落城する前に臼井、鹿島山、本佐倉、岩富の諸城を陥れ、8 月徳川家康は秀吉配下の一大名として江戸入府を行い千葉氏の所領はすべて家康の支配するところとなった。家康は本佐倉城には三浦重成(1 万石)、岩富城には北条氏勝(1 万石)、臼井城には酒井家次(3 万石)を配した。

千葉氏の本佐倉城落城から慶長 15 年(1610)土井利勝の佐倉入府までの 20 年間は本佐倉城の根古屋から大堀に統治の中枢が移った。佐倉領の本拠は本佐倉にあったが、鹿島山に譜代の所領に拠点とするべく土井利勝に築城を命じ、元和元年(1615)一国一城令により本佐倉城ほか、臼井城、岩富城は廃城となる。

## 4. 本佐倉城から佐倉城(鹿島山城)へ

堤 源太郎

### (1) 家康の関東入封と佐倉

本佐倉城の城主千葉親胤は、天文年間(1532~55)に、大叔父にあたる鹿島幹胤に対して、新城を鹿島台に築くことを命じた。親胤は本佐倉城の代替地として佐倉城の地を考えていたのではなく、当時本佐倉城の近隣には数多くの小さな城塞群が存在していたことから、本佐倉城に連なる広大な台地の西端にある鹿島台に支城として砦を築くように命じたと考えられる。しかし鹿島台は広すぎて支城には向いておらず、鹿島幹胤はそのような制約により、小さく高機能な支城の築城ができず、そのうえ親胤が暗殺されたこともあって工事は中断された。その後邦胤の時代に北条氏の命により工事を再開したが、邦胤の暗殺によりまたもや工事は中断された。結局千葉氏の代で新城は完成することはなかったが、本佐倉から鹿島台へ移る積極的な理由がなかったとも言えるし、広大な平地に本格的な近代城郭を築く力が千葉氏にはなかったとも言える。

天正 18(1590)年、徳川家康は江戸城入って関東六か国(武蔵・相模・伊豆・上野・下総・上総の六か国で石高総数は 250 万石)を領知したが、佐倉には郡代大久保十兵衛(翌年、家康から武蔵国八王子に 8 千石の所領を与えられる)を遣わし本佐倉を本拠とした。十兵衛の派遣は佐倉への家臣配置の準備であり、特に緊急を要するのは農民と土地を正確に把握することで、佐倉地方の検地は天正 19(1591)年から始められた。同年の佐倉領の家臣配置は次のとおりであった。

本佐倉城……三浦重成(義次)

臼井城……酒井家次

岩富城……北条氏勝

鹿島城(下総之内)……久能宗能

#### ①本佐倉城

天正 19(1591)年、三浦重成(義次)が封ぜられ、上総山辺郡(本能・大網)と下総印旛郡とを合わせ 1 万石を与えられる。佐倉での本拠は大堀(清光寺付近…酒々井町上本佐倉)であった。

文禄元(1592)年、三浦氏に代わって武田信吉(家康の五男)が継ぎ、その後を松平忠輝(家康の六男)が継

いだ。慶長 15(1610)年には小笠原吉次、土井利勝が本佐倉城に入って佐倉藩の藩庁が置かれた。元和元年(1615)、藩庁が新築なった佐倉城へ移転したことと一国一城制により本城は廃城となり、本佐倉の城下町は酒々井宿に移設されて成田街道の宿場町となった。

## ②白井城

天正 18(1590)年、酒井家次が3万石で封ぜられるが、文禄 2(1593)年、城内の出火により焼失。その後酒井家次は慶長9(1604)年、上野国高崎藩に加増移封となり、白井藩は廃藩となり白井城は廃城となった。

## ③岩宮城

北条氏勝が1万石で封ぜられるが、慶長 19(1614)年、養子の氏重が下野の富田に入封された後は廃城となる。

## ④鹿島城

家康は久野宗能に13,000石を下総内で与えたが、本拠は明らかではない。一説によると千葉重胤の姉の「東(とう)」のいた下屋敷、すなわち天正末期に再び築城を始め、工事中途の鹿島城であると言われている。このことは鹿島城の内郷である下根村・飯野村の文書に記されており、久野氏の領地が鹿島城かその付近であったと考えられる。

以上のように本佐倉城に武田・松平を置き、さらに小笠原吉次・土井利勝を襲封したことにより、初めて佐倉が徳川譜代の所領となった。また土井利勝の代に本佐倉から鹿島台に移り、近世の佐倉城が鹿島台鏑木村の地に落ち着いたため、家臣の武家屋敷を核とした城下町が広大な地に造成された。それまで酒々井の本佐倉を中心とした地域を佐倉と呼んでいたが、佐倉城完成以後は鹿島台、鏑木村の地を佐倉と呼ぶようになったのである。



(本佐倉城と佐倉城の位置)



(土井 利勝)

### (1) 近世佐倉城の完工と土井利勝の入封

利勝が小見川1万石から佐倉領へ移封を命じられたのは、慶長 15(1610)年の事である。この年、工事が中止されていた鹿島城再築を幕府から命じられ、翌年の鋤入れで工事が始まった。約6年の歳月を要して、元和2(1616)年の頃には完成したようである。伝記によると「……御両所様(家康・秀忠)御鷹狩と佐倉表へ御出馬遊ばし成され、鹿島山半築之城跡御覧遊ばされ、此地普請成就するに於いては天下に三つなき城たるべし、再建致す可き旨大炊頭(利勝)仰せ付けられ、夫より慶長 16(1616)年正月より築初候処……」とあるが、家康・秀忠が実際に鹿島山に足を運んだことは明らかではない。

鹿島城が再建落成されたのを機に利勝は鹿島城に入り、以後はこの城を佐倉城と呼び、鹿島台一帯の地を佐倉と呼ぶようになった。

家康が鹿島台に規模の大きな城を整備させたのは、江戸城の外郭にある要地と見たからであろうと推察される。鹿島台の広大な土地は支城としては不向きであったが、東国への護りとして、城を中心とし武家屋敷・町屋などを含めた城下町を形成するのに大きなメリットがある、と捉えたからであろう。家康の遺言百カ条を並べた『富士見の蔵』と題する文書(残念ながら偽物とも言われている)の59条目には「一、武州岩附(槻)・川越・下総佐倉……相州小田原……は江戸の附庸城也……」と記されている。これは佐倉城の性

格を端的に表現したものである。利勝は佐倉に所替となった年に老中となり、幕政の担い手となった。

佐倉には徳川の一門、ことに家康の五男・六男を封じ、更に土井利勝を封じたことは佐倉を江戸の護りとして重視したもので、それ以後の佐倉城主となるものの性格がこの頃に決められたと言える。以後幕府の要職に就く大名は佐倉に移されるケースが多く、比較的頻繁に城主の交代をみた。

幕末の堀田家の石高は11万石であるが、これは房総最大の譜代藩である。このような藩の規模は、江戸城下の防衛の観点から見ると、房総地域から常陸・下野までを睨んだ要地であったことが背景として考えられる。首都防衛の要地と言う佐倉の位置付けは明治になっても受け継がれ、重要な軍事拠点として、明治7(1874)年には早くも新政府の歩兵第2連隊が入ってくるのである。



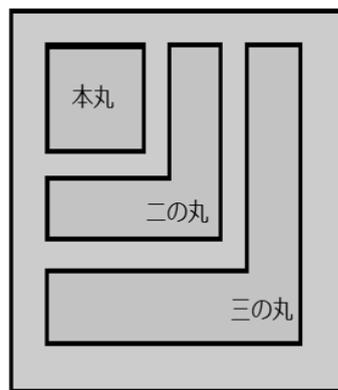
佐倉連隊記念碑（城址公園自由広場）

### (3) 佐倉城の立地環境

- ① 佐倉は小田原・川越などと同様、江戸を取り巻く要害の地であり、下総地方の中心に位置している。また成田・佐原更に銚子に至る街道上にあって、江戸から一日行程の距離にある。
- ② 東西に馬の背状に伸びる尾根の先端に位置しており、地高(盛土や崖などの高さを近くのパラな所との差であわしたもの)約20mの広い台地に恵まれており、南と西側には険しい崖の下に、印旛沼に注ぐ高崎川と鹿島川があって外堀の役割を果たし北側に広がる印旛沼と共に自然の要害を形成している。
- ③ 東側の尾根は半島上に舌状台地が続き、この台地が近世城郭としての重要な町人の居住地、及びそれを取り巻く形で武家屋敷を配置するのに格好の条件を備えている。
- ④ 軍事的要件が最優先されていた中世城郭に対し、領国支配の要としての近世城下町は、家臣団を集住させ、更にその家臣団の生活を維持するための商人・職人を城下に住まわせるための土地が必要で、この場所はそうした条件を満たしている。
- ⑤ 政治的な平和の確保のための守りと、そのための権威の象徴として、天守を備えた平和と権威のシンボルとしての城である。一方藩主の活動が幕政中心となるため、藩政との兼務を考慮し地理的便宜も図られた。



(1670年頃の佐倉城)



(梯郭式曲輪配置)

### (4) 佐倉城の規模・構造

- ① 佐倉城は、北方は印旛沼に続く低湿地帯、西と南は鹿島川とそれに合流する高崎川を眼下に見下ろす

鹿島台約20万坪を地域とする平山城である。川や急崖が自然の要塞となっているため石を使わず築城することが可能であった。城内は舌状台地先端部を本丸とした梯郭式曲輪配置で、東向きに大手門を置き、三の丸、二の丸、本丸と搦め手の椎木曲輪に区画され、これを空堀で区切り、更に台地の裾周りには水堀を設け（大手門北側崖下より反時計方向に一の堀～三の堀と続き、ゴケ曲輪の前から田町門のところまでが四の堀、田町門から成田街道に沿って西に延びているのが五の堀、城の西側を南に鹿島不明門までが三十間堀である。本丸を囲むように造られているのが清水堀、三の丸南崖下から大聖院西崖下までが鷹匠堀、この先大手門方向に向かって三味線堀がある）、外側は自然の川で防御を固くしていた。石垣はないが自然の地形を生かし工夫をこらした縄張りであり、織田信長や秀吉・家康などの天下人の城を手本にした、典型的な織豊系城郭であった。

基本構造や天主・門等の建造物は、後世の絵図と比較しても幕末まで大きな変化は見られない。

- ② 城内には大手門、三の門、二の門、一の門を経て到達するが、本丸には屋形（館）があり、藩の政治の中心的な機能を果たす場所であった。主要な建物は屋形のほかに天守閣、二重の銅櫓角櫓（すみやぐら）などが存在した。城郭規模は東西 1.2 km、南北 1.0 km、総面積20万坪の広大なものであった。
- ③ 本丸の北方側には四重の、東片側には五十の急峻なV字空堀と縄文を構え、この北側と東側両台地にくさび上に入り込む谷筋には姥が池が行く手を阻むように位置している。周辺は20m前後の高低差のある急崖とこれに沿って水堀がめぐらされており、天然の要害を十分に計算して縄張りがきわめて理論的に構成された近代城郭である。
- ④ 本丸の一の門から東方台地上ほぼ一直線に、二の門、三の門、大手門がそれぞれ土塁や空堀を備えて置かれ、北方側には城米不明門、椎木門、それに街道沿いに田町門を備えていた。深い空堀と土塁が固い防御を果たし、守りやすく攻めにくい城郭といえる。

#### (5)各所の概要

- ① 大手門……大手門(8間×4間、2階建、正睦の代より馬具庫)は追手門とも書き『古今佐倉眞佐』に「追手門をてうな門と号す」とあるように「てうな(ちょうな)門」とも呼ばれ、一説には上総・武田氏本城の庁(長)南門を移築したものである、と言われている。  
前面は土塁で囲まれた15間四方の枳形で、土塁の北と南は空堀、枳形土手の北側には鐘樓が置かれ、城門の開閉や役所の始業・終業時刻を知らせていた。城絵図には松平乗久の時代(第7代目主、寛文1年—1661年—延宝6年—1678年)に記載されており、稲葉正知時代に鐘樓が新鑄(しんちゅう)され、明治になって教安寺に移された。
- ② 広小路……大手門から西に向かって三の門に至るところが広小路で、城絵図によると利勝時代は広町と呼ばれていた。前堀田氏の頃から広小路と呼ばれるようになり、両側に50軒ほどの中級侍屋敷が並んでいた。北側は「勘定書」或いは「会所(一般政務)」等の役所が置かれた。その最北端には天神社と真言宗の大乗院があり、正睦の代には藩校の西塾が存在した。南側は斜面地形で中下町、大下町と呼ばれ、侍屋敷や作業場が置かれた。また正順の時代の寛政 11(1799)年には三の丸御殿が作られ藩主の住居となり、幕末にはこの中に「松山御殿」が築かれ、蟄居を命じられた正睦の住まいとなった。  
南側斜面下は利勝時代に侍屋敷4区画と厩(うまや)があったが、正信時代には厩が鷹部屋となり8代目城主大久保忠朝時代以降は侍屋敷、鷹小屋、小役人長屋などが置かれていた。正愛時代に鷹部屋は廃止され、明治以降は広小路付近一帯を平均化して練兵場とした。鷹匠町は射撃場となった。
- ③ 三の門……空堀に挟まれた三の門は6間×3間、2階建、作事道具庫として使われていた。三の門内には最上層レベルの重臣の屋敷などがあり、左手奥の鷹匠町の方へ通じる坂の降り口には佐倉城鎮守の浅間神社があった。この神社は明治になって諏訪尾余にある浅間神社に合祀された。
- ④ 二の門……門の両側は空堀で8間×3間、2階建、武器庫として使用されていた。門内側には腰かけ長屋が「くの字形」にあって、進入路の障害としての機能を有していた。なお現在、二の門内左手近くに子規の句碑が建っている。
- ⑤ 御対面所……御対面所は二の門に入って右手にあり、北と東は土塁や空堀で固め、南と西は周り堀で区切られていた。対面所に入る門は二か所あり、表御門はこの二の門に入ってすぐの所に位置し、裏門は北側の米倉近くにあり、門の両側には供待ちの腰かけ長屋があった。御対面所は 413 畳の大規模な建

物であり、城主居城の時はこの館に住んだ。しかし腐朽が進み文化(1805)年には取り壊されその後の城主は新たに造られた三の丸御殿に居住するようになった。

- ⑥ 不明門……御対面所から少し北側に位置し、8間×3間、2階建で馬具役所が置かれ、馬具が修納されていた。
- ⑦ 一の門・本丸……一の門は8間×4間、2階建で弓方役所が置かれ、弓庫として使われていた。ここから入ると本丸で、舌状台地先端部にあつて、南側と西側に35mほどの急崖を擁し、崖下には沿うように水堀が存在した。一方北側と東側は急峻なV字状の空堀を構えていた。本丸館は「御屋形」と呼ばれ、東西58間(役120m)、南北70間(約140m)の大きな建物で、城主は日常ここに居住せず、年始の折などに賀礼を受ける際使用した。主な間取りは城主御座所、広間、銅櫓、玄関、風呂場、調理場などがあつた。天守閣は8間×7間、高さ90尺の三層四階建で、質実な外観を持つ素朴な造りとなつていた。築城した土井利勝が、幕府による城郭築城や修築に関する厳しい規制令に関与したことから、自身の築城にあたっては規模や装飾にもかなり自制したものと推測できる。天守閣は文化10(1813)年、堀田正愛の代に盗賊の火の不始末により焼失した。
- ⑧ 銅櫓……本丸の北隅には6間四方、2階建の銅櫓があり、御金蔵として使用されていた。この建物は太田道灌が江戸城内に建築・使用していたものを、寛永6(1629)年に土井利勝が家光より譲り受け、移築したと伝えられている。
- ⑨ 角櫓……6間×7間の2階建で武器庫として使用されていたが、「極めて粗悪」な建物で寛政3(1792)年に大修理が行われている。
- ⑩ 台所門……7間×3間、2階建で、本丸南に裏門として置かれた。文化3(1806)年に老朽化により取り壊される。
- ⑪ 椎木門・馬出……7間×3間、2階建で、前方に角馬出を配して防備を固めていた。馬出とは門の前方に築いて、人馬の動きを敵に悟られぬようにして守備と反撃の拠点にする縄張りのことで、佐倉城の場合形が「コ」の字型、いわゆる角馬出となつていた。馬出の周囲を土塁で囲み、その外側に空堀を張り巡らす構成で、東西20間、南北89間と記録に残っている。現在再現された角馬出があつて往時の様子を知ることができる。
- ⑫ 惣曲輪と椎木曲輪……角馬出の北東に広がる台地が惣曲輪と椎木曲輪である。江戸時代中頃までは惣曲輪に藩主下屋敷があつたが、江戸後期の堀田氏時代には調練所となつていた。椎木曲輪には上層から中級の藩士を中心とした武家屋敷が並び幕末には椎木長屋なども存在した。
- ⑬ 田町門……佐倉城の搦め手となる門で、瓦葺きの冠木門で鯨ほこ付きの平屋と言われているが写真や記録等は一切ない。
- ⑭ 鹿島不明門……田町門から西に延びた堀(50間堀)は30間堀につながり、その行き止まりに鹿島不明門があつた。老朽化により文化9(1812)年に取り壊されたようである。

## (6)佐倉城下町

- ①城下町の構造……全国の城下町と同様、城・武家屋敷・町屋と明確に区分されており、築城に伴って形成されたところに特長がある。城下は外堀を境に大きく城内と城外に分けられる。台地西端部に内郭にあたる本丸・二の丸・三の丸を置き、その北側に椎木曲輪・根曲輪、東側に天神曲輪や広小路・中下町・大下町を配して外郭を形成、外郭は主に上級武士の屋敷地とした。ここまでが城内にあたる。城外東側台地上に宮小路・鐺木小路・海隣寺並木・船見町・裏新町・中尾余町(なかびょうまち)・最上町・野狐台(やっこだい)等には主に中・下級武士の屋敷や足軽長屋が配され、城内への主要口として田町門と大手門(追手門)が設けられた。これら武家屋敷は官舎の意味合いが強く、家臣の役職や身分の移動により頻りに屋敷替えがなされた。城外北側低地から東側台地上にかけてこれらの屋敷地を貫くように成田街道が通り、江戸方の街道沿いから田町・海隣寺門前・横町・上町・二番町・仲町・肴町・間之町(あいのまち)・弥勒町・本町に町屋を形成した。

上記の内、横町～間之町は佐倉新町を構成し、田町・佐倉新町・弥勒町・本町・本佐倉町・酒々井町を佐倉六町(さくらりくちょう)として町奉行の支配下とした。田町は元々「椎の木」という地域に住んでいた

住民が、築城により強制的に移転させられたという伝えがあるとおり、新町に対して本来の町はここであつたとも言われている。特に職人たちの多くは、この田町に住居を構えていたようである。

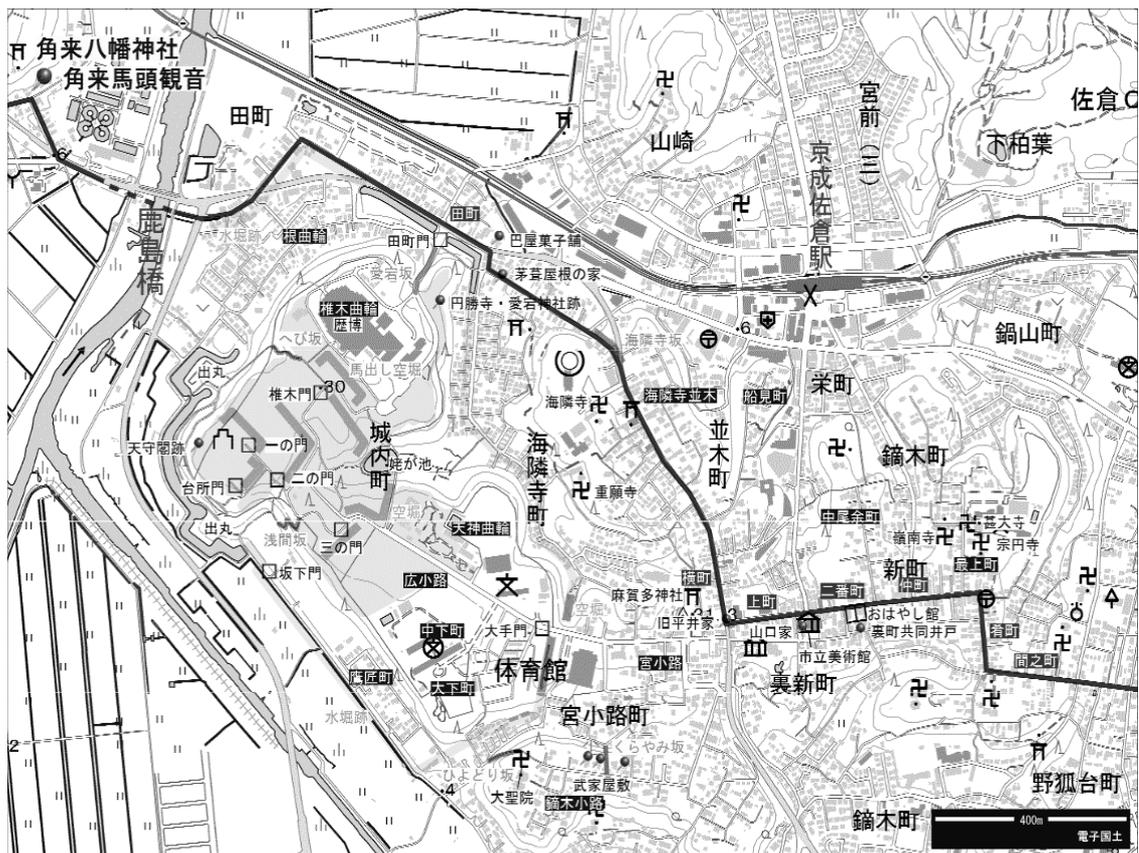
この町中を貫通する街道が江戸千住から出る佐倉道で、その延長は成田に至り近世中期以降は成田山への参詣路として賑わい宿場町的な性格も有していた。

佐倉新町の敷地割りの多くは、間口5間程度、奥行き 20~30間程度で、矩形型(くけいがた=長方形)の敷地が街道に沿って並んでいた。また新町のみが商工業者を住まわせるため意図的に造った町で、城下町の中核部分であった。江戸時代後期には江戸に勝るとも劣らないほどの町屋が立ち並んでいたことから、「佐倉新町江戸まさり」と言う言葉が伝えられるようになった。

武家用の衣類・文房具・小間物等を扱う店は田町・海隣寺門前・横町・上町・二番町・仲町に多かったが、江戸に近いこともあって呉服などの高級品は江戸に依存していた。また漁商は肴町に集まっており、手作りで沢山の野菜が採れたため八百屋はなかったようである。

② 城下町の特長……平地ではなく台地を利用したことから、これを繋ぐため切り通しの坂が多く、周辺農村と城下町との往来には坂道を通る必要があつた。

また江戸に近いことにより、商工業の多くが江戸の資本家に吸収され、城下の商工業にこれというものが育たず、藩内独自に国産を興すことができなかつた。工藝にしても江戸の影響を受け独自のものが育たず、城下町で売られる商品の数々は日常の諸事入用品が中心で、高価な商品は江戸で購入された。前記の呉服をはじめ武具も江戸の職人を頼みにしており、商工業は振るわなかつた。また城下での商いは侍を顧客の中心としたため、顧客数にも発展がみられなかつた。一方城主の移動交替が頻繁に行われ、江戸住まいの期間が長く、帰城の期間が短かつたことから藩治にも影響し、領内の殖産にも見るべきものがなく、これが城下の商工を育てなくしたと言える。



(佐倉城下町)



## 参考文献・資料

- 千葉市史 千葉市 1974年  
千葉市歴史散歩 千葉市教育委員会 1994年3月  
千葉いまむかし 千葉市教育委員会 2014年3月  
千葉県の歴史散歩 千葉県高等学校教育研究会歴史部会 山川出版社 2006年5月  
千葉一族入門辞典 千葉市サミット実行委員会 敬文社書房 2016年8月  
千葉常胤公ものがたり 千葉市総合政策局 2016年3月  
千葉市立郷土博物館閲覧資料各種  
酒々井町教育委員会資料各種  
旧陸軍陸地測量部 2万5千分の1地形図 明治14年～17年  
千葉県の歴史 小笠原長和、川村 優 山川出版社 1990年10月  
わが町の歴史 千葉 川村 優、三浦茂一 文一総合出版 1987年3月  
あなたの知らない千葉県の歴史 山本博文 洋泉社 2012年7月  
千葉の道千年物語 山本光正 千葉日報社 2002年5月  
東庄町史 東庄町 1982年12月  
上総下総千葉一族 丸井敬司 新人物往来社 1999年12月  
中世の佐倉 佐倉市  
本佐倉城跡見学会資料 NPO法人まちづくり支援ネットワーク佐倉  
佐倉の歴史 篠丸頼彦 (株)東洋書院 1981年11月  
日本歴史地名体系第 12巻 小笠原長和、高橋健一 (株)平凡社 1996年8月  
佐倉城を歩く 国立歴史民俗博物館 2000年10月  
城下町古地図散歩 9 江戸・関東の城下町 (株)平凡社 1998年10月  
町割 ウィキペディア